

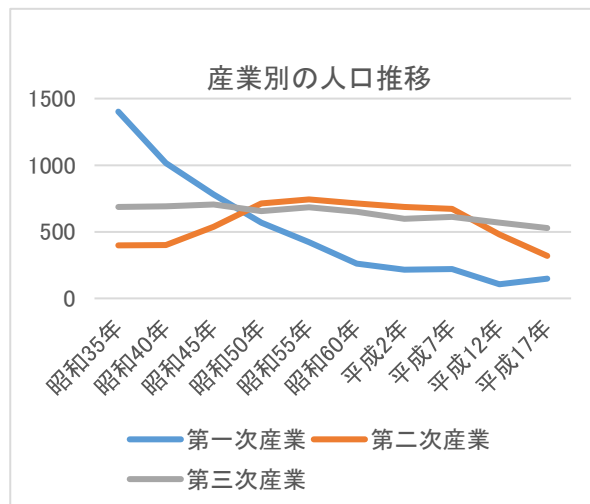
会津桐を生かした製品

—会津の特産物で地域の活性化を促す—

A2201625 堀江 滯

研究の背景

会津の地場産業の調査のために、三島町にある会津桐を使った製品を製作している会津桐タンス株式会社様に訪問した。その際、会津桐についてお話を聞かせてもらった。桐製品を扱う業者は複数あるものの、国内で生産されている桐を使っている業者はあまりおらず、ほとんどが中国産の桐が使われてしまっている。会津の桐は桐製品を扱う中で約3%しか使われていない。また、三島町では年々第一次産業の人口が減り、会津桐を育てる人がいなくなっている。そこで、昔からの伝統を絶やさないために、若年層にも会津桐を広められるような製品を作りたい。小さいころから親しむことで、もっと桐を使うことの良さを伝えることができ、桐製品の発展や、後継者の育成につながるのではないかと考えた。よって、若者をターゲットとして製作した。



研究の目的

会津の桐の良さを生かした若者でも使える日常製品

幼い時期から触れ合うことで、桐に慣れ親しんでもらえるような製品をつくる。

研究のプロセス



➤ 調査

今までの桐に関する文献調査、また、会津桐の現地調査。

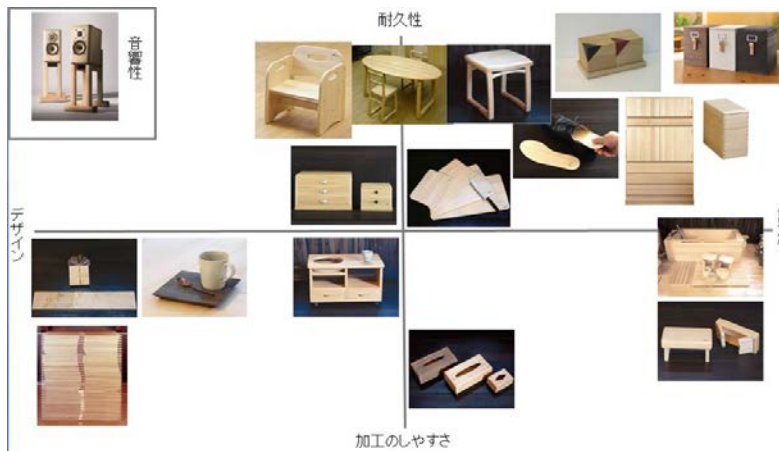
実際に会津の桐工房に訪問を行った。先述したように、現在、国産の桐素材が失われている。国内の高価で良質な桐素材よりも、海外の安価な桐素材が使用されることが多くなっていることが分かった。安価であるために外国産の素材が多く使われ、販売量の減少・生産量の減少につながっている。

また、桐についての特性や基本情報について分かった。桐の他の木材に比べて優れている主な点は、軽量であることや、調湿性、保温性が良い、木目の綺麗さなどがあげられる。

➤ 分析

今ある主な桐製品をまとめて、おおまかに分類した。

最もよく利用されるのが調湿性であった。そのため、桐たんす、米びつが多くの会社から様々なデザインのものが出されていた。加工のしやすさから、からくり仕掛けにするものなど見受けられた。桐の綺麗な木目を生かしている製品が多く、シンプルに素材そのもので勝負しているものが多かった。

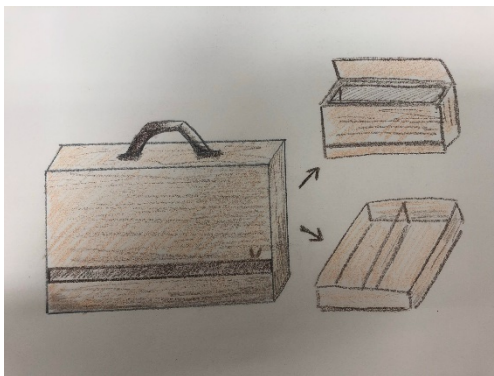


しかし、市場にでている多くの作品ではひとつの特徴だけではなく、複数の特徴をつかっていた。どれかひとつの特徴だけをつかうものでは桐の良さはひきたたない。様々な良さを考慮しなければならない。

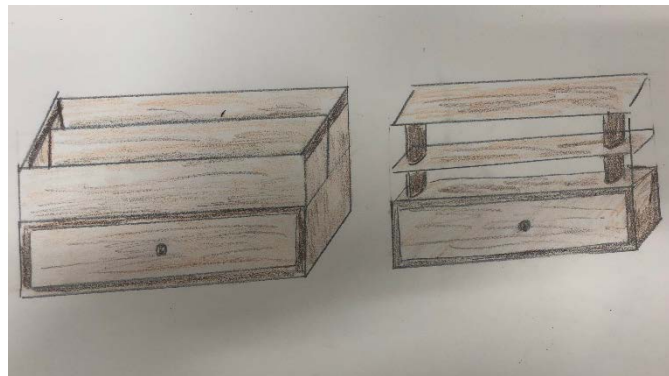
➤ アイデア展開

おもちゃや飾りといったものでは親しみが薄く、一時的に使うだけで終わってしまうと考えた。そのため、日用品など常日頃使用することができるものを製作する。

成果物(完成スケッチ)



↑ 1. 小学校の時期は持ち運べるお道具箱として、後に書類入れとして利用できる



↑ 2. 幼い時期は絵本入れやおもちゃ箱として利用ができる。成長につれて増える本が収納できるような棚に変形させる。

考察

今の日本は大量生産、大量消費型の世界になってしまっている。多くの物が一時的に使われることを前提として、長期で使うことを考えた材料の使い方や製品の作成がほとんどなされていない。その結果、日本の美德であった、もったいない精神や物を何回も修理して長く使うという‘こころ’が失われているように感じる。日本には多くのすばらしい伝統・文化がある。それらが衰退し、忘れられないようにするためには、それらを利用して、今の日本でも使用でき、良さを十分に引き出した製品が皆に使われることが一番の対策であるのではないか。